
幼馴染はチビなお前

森林 夏海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染はチビなお前

【Nコード】

N8799Y

【作者名】

森林 夏海

【あらすじ】

チビ、負けず嫌い、生意気――。挙げれば挙げるほどキリがない。そんな印象を持つハルカと七年前に知り合ったユウ。十三の歳になってももめ事が絶えない二人。二人のおかげでクラスは毎日波乱万丈、ハチャメチャ。魔法が存在する王国、聖ノアルス国のトリス学園、中等級クラス八組で今日も何かが起こる――

プロローグ（前書き）

とても短く、乱雑で読みにくい文章ですが、最後までお読みいただければ光栄です。

脱字・誤字等はお見逃してください。

では、どうぞ――

ブローグ

トリス学園入学以来、というと、ちょうど五、六歳の頃だっただろうか。出会ってすぐに仲良くなった……

—— いや、訂正^{ていせい}しよう。そんなすぐに仲良くなったわけがない。なんせ、ハルカは凶暴な小動物、例えるなら発情期の小猿と同等……

「痛っ！」

ユウの顔面に教科書が見事に命中した。それを目の当たりにしたクラスメイトは爆笑。

毎日のように、この教室では、ユウとハルカの乱闘^{らんとう}が繰り広げられていた。一度始まったら誰にも止めることはできない。

ハルカとユウの乱闘はそう珍^{めづ}しいものではなかった。

毎日のようにというと言い過ぎだが、まあ、この学級の名物といってもいい。

乱闘の兆候が見え始めると、生徒の殆どは観戦へとまわる。

なお、この乱闘を、観戦する場合は、流れ弾が飛んでくるかもしれないから盾となるようなものを持参、またはその陰に身を隠すことをお勧めしたい。

「痛ってエな！ 鼻血出たらどうするんだよ！チビ！」

「チビ、チビ、チビうるさい！！ あんた、どれだけ、こつちが深刻に悩んでいるのか知っているの！？」

「さあ、こつちの知ったことじゃ……」と言う間に、ノートが飛んできた。

ユウはそれを避けると走り出した。「待て！」という掛け声と共にハルカは、その逃げる侮辱者を追いかけた。

ユウは教室の窓際、いわゆる掃除用具コーナーにつくと、そこから心強い武器を取り出した。

掃除用具から取り出される武器と比喻される物は、殆どの方がお察しであるう。

幕を槍のように構え、先端を、机たちが作る角を曲がり、走ってくるハルカに向けた。

ハルカはキュキュつと、足音を鳴らして立ち止まると、周囲を見渡した。

はっ、と教卓に上げられていた何かに目をつけると、それを手に取った。

「ちよっ、待った！ それはないって！」

ハルカが手にしたものは、クラスの出席名簿帳であった。

危機感を全く抱かせない見た目であり、その通り軽量であるが、大抵、角には角止めが施されている。実は、この角が凶器なのだ。

この角で頭上にアタックされた暁には思いがけない痛みに思わず声を上げてしまうだろう。

以前にハルカから鉄槌を打込まれたユウにとっては最悪の武器で

あつた。

さて、心のコンディションを考慮（こうりょ）すると、この状況はユウにとっては元の木阿弥（もくあみ）である。

ユウの額からは少しの冷や汗。教室には、長い戦いに、いよいよ決着（たつよ）というような変な緊迫感が漂う。

沈黙を断ち切ったのはユウの足だった。ハルカの目の前で箒（ほうき）を両手で掲げ一刀両断！ という理想は一瞬で崩れた。

掲げた瞬間にハルカが目の前から消えた、と思った瞬間、ゴンツ。頭上からの衝撃の波が一気に伝わり、目の前が二、三秒くらぐらした。

背後からの何かいるようなの気配と、後頭部近くの痛みから全ては氷解（ひようかい）した。

「痛つてえ……！」

木の棒が床に落ちる音が響いた。頭を抱えるユウを見て、ハルカは勝負あったといった顔つきをした。

「これで少しは懲りた？」

「痛つてえな！ 空間移動なんて卑怯ひきょうだろ！」

そう、あの時ハルカは空間移動術を使用していた。

「卑怯ひきょうつて何よ！ 大体、そっちから喧嘩かを吹っ掛けてきたんでしょ！」

感情が高ぶったユウは、ハルカの言うことにお構かまいなし。

「正々堂々せいせいどうどう正面から立ち向かって来いよ！ 魔術なんか使いやがって！」

二人の間に、仲介ちゅうかいを装よそおったリュウが入る。

「まあ、まあ。ここは神聖な審判たる僕がジャッジしよう」

こういった喧嘩では、大抵周りを盛り上げる司会的役をする奴がいる。それがリュウだった。

どこか抜けたような感じ、良く言えば穏和おんわな雰囲気おんわの少年だ。

「僕が審判するに、今回の試合は」

いつもなら彼の仲介で少しは二人の熱も冷めるのだが、今回は違った。

熱度ねんどが極端に上がった二人には彼の声は届かなかった。

「あー！　うるさい！　あんたはすっこんでて！」

「お前来るとややこしくなる！」

二人の拳の入った声と互いの両手で、リュウは呆気なく突き飛ばされた。一瞬志は共になったものの、またすぐにいがみ合った。

倒れた哀れな仲介者に二人くらいの生徒が駆け寄り、その肩を持つて、殺気立ったその場からすぐに退場した。

「大体、お前だって俺の悪口言うじゃねえか！」

「例えば？」

「例えば……。ん？ そうだな……。」「
凶星だった。」

「こっちはね、真剣に悩んでんの！」

「小っちゃいことを？」

「また言ったあ!!」

いよいよ取っ組み合いが始まるうとしていた。

教室が再びざわめき始めた。

——
が、それはすぐに静寂と化した。

取っ組み合いの態勢に入り、睨み合う二人の頭を大きい掌が力強く掴み、ぐいと横に曲げた。

「お前ら、一体何しているんだ？」

掌が導いた先には、目の鋭い、恐ろしい担任の顔があつた。

頬に傷の縫い跡があり、サングラスをかけると、なお一層恐さを増すような顔なのに、虫の居所が悪い時のその恐ろしさは例えられたものじゃかった。

「おいこら、お前エら。軽く教室が暴れ馬が去った後のような事になってんだけど……」

ユウとハルカの熱は一気に冷めた。担任の静かな態度が異様な恐怖を抱かせた。まず、ピアスをしている時点で普通の教師とはとても思えない――

「まあ、理由はともかくだ」

二人は散々^{さんざん}注意の声を浴びせられ、挙句^{あげく}の果てには両手に水入りバケツを持たされ、廊下^{ろうか}に放り出された。馴染がないようであるお決まりのこのパターン。

放り出された二人にはお構い^{かま}なしに、授業開始の鐘は鳴る――

プロローグ（後書き）

いかがでしたでしょうか。

少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

頑張ってこれからボチボチ更新する予定です。その時、またお読みになっていただけたら嬉しいです。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8799y/>

幼馴染はチビなお前

2011年11月26日18時53分発行